

岐阜市立図書館



JR 岐阜駅を出ると黄金の信長像に迎えられました。バスターミナルからバスに乗って約 15 分。大きな広場の向こうに岐阜の山並みを模した特徴的な建物が見えます。「みんなの森 ぎふメディアコスモス」です。「知の拠点」である図書館、「絆の拠点」である市民活動交流センターと多文化交流プラザ、「文化の拠点」であるホールや展示ギャラリーなどの複合文化施設として、2015 年に開館しました。このぎふメディアコスモスの 2 階が、今回取材させていただく岐阜市立中央図書館です。インタビューに応じてくださるのは図書館事業係主任の松野様です。はじめに館内を案内していただき、その後インタビューさせていただくことになりました。



図書館事業係主任の松野様

思わず見惚れる、グローブ

エスカレーターで 2 階に上がると、目の前に木製の格子屋根とグローブと呼ばれる大きな傘が現れました。思わず声が漏れるほど、とても美しい光景でした。緩やかに波打つ屋根と大小のグローブはどちらを向いても不思議で、高い書架はなく全体が見渡せる素敵な空間でした。また、グローブには光を拡散させたり、天窓を開けて自然の風の流れを生む効果があり、グローブに施された美しい模様は一つ一つデザインが異なり目的のエリアを探す目印の役割もあるのだそうです。



子供の声は未来の声

11個あるというグローブのうち、まず案内していただいた「親子のグローブ」では緑の絨毯の上で座ったり寝転がったりすることができます。すぐそばには「ころん」と「ごろん」と呼ばれる秘密基地のような読書スペース。館内は白色とストランドボードという温かみのある木材で統一されていて、落ち着いた雰囲気です。通路も広くゆったりしており、ベビーカーを押している女性もいました。赤ちゃんの泣き声も聞こえましたが、こちらの図書館では小さなお子さんの少しのざわつきは注意することなく、子どもたちを見守る場所であることを大切にされているのだそうです。岐阜市立図書館の理念のひとつ、「子どもの声は未来の声」を体感できる優しい雰囲気でした。



誰もが気持ちよく過ごせるサードプレイス

座席の種類も豊富です。展示物かと思いきや、実は読書スペースだという川舟。一番大きな「ゆったりグローブ」には、人工籐でできた座面の高さや広さが異なる大きなソファがありました。テラス席も3か所あり、外の空気に触れながら読書をすることもできます。そのうち金華山テラスからは、岐阜市のシンボル、金華山と岐阜城を眺めることができました。自分だけのお気に入りの場所で、思い思いの形で読書を楽しむことができます。

岐阜市立中央図書館のもうひとつの理念は「滞在型図書館」、「本で人とまちをつなぐ屋根のついた公園」であり、誰もが気持ちよく過ごせる場所、利用者にとってのサードプレイスとなることを大切にされています。書架はグローブを中心に渦巻きのように配置されています。整然と並んだ書架に慣れている私には本を探すのは難しいのではないかという疑問がありましたが、サインが見やすくわかりやすいです。腰の高さくらいある白い四角柱状の立体的な館内図を中心にして、床に円が描かれ放射状にエリアの名称が書かれていました。自分が立っている場所からどの方向に進めばよいか一目ですぐにわかります。独特の形をした文字は「みんなの森フォント」というメディアコスモスのために作られたフォントだそうです。トイレやエレベーターを示すサインもとてもかわいく、探すのが楽しくなりました。



つながる、展示と掲示板

館内のいたるところに素敵な展示や掲示物がたくさんありました。児童書の本棚の隙間には様々なお店のような展示が並び、商店街ができていました。ドラえもんやのび太くんがいそうな土管を置いた空き地もあり、どれも司書さんの手作りだそうです。商店街には郵便ポストがあり、小さな子どもたちからにゃんこカートの「にゃん吉」さんへのお便りなどが寄せられていました。また、ヤングアダルトのコーナーには「心の叫びを聞け！！YA 交流掲示板」があり、本選びの相談から恋愛のお悩みまで、10代のいろんな声が寄せられていました。なんと、これまでに2000件以上の声が寄せられているのだそうです。

その一つ一つに司書さんからの丁寧でユーモアあふれるお返事が手書きで添えてありました。展示グローブにはビジネス支援や文学など様々なジャンルの展示があり、工夫を凝らした掲示物やポップは、こちらもすべて司書さんの手作りだそうです。今回の訪問では松野様以外の図書館の方とお話をすることはなかったのですが、多くの司書さんと触れ合ったような不思議な感覚がありました。ポップやYA掲示板のお返

事にも「司書○○」といったイニシャルやハンドルネームが書かれており、図書館の向こうに居る司書さんの存在を感じることができます。松野様のお話の中で「サードプレイス」というキーワードが何度も出てきましたが、「誰かに見守られている、誰かとつながっている」という感覚が、居心地の良さにつながっているのだなと感じました。



ひろがる、イベント

開館当初から様々なイベントを開催されており、第44夜まで回数を重ねる「おとの夜学」は、NPO法人との協働事業で、地元の人でも知らなかつたような岐阜の歴史や文化を知る人気のイベントだそうです。開催後は講座をまとめたブックレットを販売するなど、次へとつながる取り組みがなされています。講座を通して郷土の魅力を再確認し、もっと岐阜が好きになる、シビックプライドの醸成にもつながっているのだそうです。郷土の情報が集まる場として

アーカイブの役割を担っていることも印象的でした。また、本と人を結ぶリーダーを育成する「子ども司書養成講座」もとても人気の講座だそうです。小学4年生から中学3年生までを対象とした講座で、4日



間の講座を終えると「子ども司書」として図書館から認定されます。認定された子ども司書さんは、毎月1回ラジオ番組を制作しています。番組の企画から出演まですべてを担当するそうです。資格を取つて終わりではない仕組みがユニークだと感じました。これまでに140人の子ども司書さんが誕生しているのだそうです。高校生になっても続けて活動に参加している子ども司書さんもいると聞いて驚きました。とても素晴らしい活動だと思いました。

コロナ禍では開催がままならない状況もありましたが、「ぼくのわたしのショートショート発表会」等、イベントのオンライン開催といった新しい取り組みもされていました。オンラインでの取り組みは、イベントを見てもらえる人数が増え、遠方からの参加も可能になるなど、良い面もあったそうです。苦労を乗り越えて、ますます活動の幅を広げられていました。なお、これらのイベントは各部門の担当者がそれぞれに企画しているものに加え、市民の持ち込み企画もあるのだそうです。「図書館でこんなことをしてみたい」という市民の望みを実現に向けて図書館がいっしょに動く、市民との協働でイベントが行われていることは、まさに「人とまちをつなぐ場所」なのだと感じました。

今までとこれから

移転前の旧岐阜市立図書館の来館者数は2013（平成25）年に約15万人だったのに対し、2015年メディアコスモスへ移転後の来館者数は約116万人と大きく増加したそうです。中でも40歳未満の若い世代の方の利用が多く、学校帰りの中高生で満席になることも珍しくないとか。本で人とまちをつなぐ存在であること、子どもの育成を見守り市民にとってのサードプレイスであること、開館当時の構想が実現され、市民に定着していることがうかがえます。全体を通じて、図書館の理念が働く人たちだけでなく利用者にも共有されていること、継承していく工夫や努力がなされていることを強く感じました。館内に掲示されていた年度ごとの沿革では、これまでの取り組みが一目でわかるようになっていましたが、開館当初から続いていることに加え、毎年新しい事にも取り組まれており、これからもますます発展していくのだろうと感じました。

松野様のお話からは、常に利用者とのつながりを大切にされていることが伝わってきました。また、こんな風に自分が働く図書館についてお話しできるだろうかと自分自身を振り返りました。長時間かけて館内中をめぐり興奮気味に写真を撮りまくりましたが、本当に見どころも多く、ここには書ききれなかったことがたくさんあります。気になった方はぜひ訪れてみてほしいです。帰り道、黄金の信長像に「また来ます」と心の中で呟いて、岐阜駅を後にしました。

取材者 キャリアパワー司書スタッフ 砂田 久美